

き 紀 の 之 み 水 な 門 と



▶巻頭言

この度、地域活性化総合センター紀州経済史文化史研究所では、ニューズレター『紀州研 News Letter きのみなと』を発刊する運びとなりました。

当研究所は、通称「紀州研」として67年の歴史を有します。今日の研究所の礎を築かれた諸先輩の志を引き継ぎますとともに、一層の機能充実を図るため、平成27年度に3部門（研究部門、展示部門、教育部門）を設置し、各部門長のリーダーシップのもと、本学4学部およびセンターの教員で構成される所員の皆様のお力添えを得つつ、学部資金の獲得にも努め、新たな事業も展開してまいりました。

その一環として、平成30年度、より広範囲かつ積極的に知の提供に資することを目的とし、第一にSNSによる発信を試み、さらに、その内容を紙媒体であるニューズレターにも集約し、本所の所蔵資料の公開ならびに所員の研究の一端を学内外に公開することに着手いたしました。現代的手法と紙媒体という古典的な手段を有機的に組み合わせつつ発信することにより、一層幅広い層の皆様に紀州研を身近なものと感じていただければと願っております。

本所通称「きしゅうけん」という音から、本取組みのためにロゴ「紀州研」も誕生いたしました。当研究所のさまざまな事業が、学生達をはじめ皆様の知的好奇心を喚起する種となり、紀州地域学をめぐる諸学問への関心が芽吹き、花開く契機となることを期待いたします。さらには皆様からも知の成果を共有いただけますことを願っております。まずは手に取って、ご高覧いただけたならば幸甚に存じます。

（紀州経済史文化史研究所長 東悦子）



紀州研
WAKAYAMA UNIVERSITY

紀州研ロゴマーク誕生!

2018年11月、「紀州研」のロゴマークが誕生しました!

今年、紀州研では、和歌山県・紀伊半島の歴史と文化・文化財についての「発信力」をさらにパワーアップするため、SNSでの情報・動画配信をリスタートさせ、この「きのみなと」を発刊することにしました。

Twitter (@kishuken_notice)・Facebook (<https://www.facebook.com/kishuken/>)のほか、YouTubeにも紀州経済史文化史研究所チャンネルがありますので、ぜひ、ブックマークをお願いします。

展示情報・研究情報を次々公開していきます!

この事業は、「SNSと大学博物館展示機能とを融合させた紀州地域とその文化資源についてのオープンアーカイブスの構築」(平成30年度文化芸術振興費補助金「地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」)によるものです。

(紀州経済史文化史研究所副所長 大橋直義)

Exhibition report

企画展

和歌祭と現代—祭礼のフェスティバル化と再興—

紀州経済史文化史研究所では2010年企画展「紀州研所蔵の和歌の浦資料」での御船歌復興、また翌2011年の特別展「みる・きく・たのしむ和歌祭」の開催以来、毎年和歌祭に関するさまざまなテーマの企画展を開催してまいりました。そして昨年の企画展「唐人復興！—和歌祭の唐物様（唐船・唐人）—」では、本学国際学生部門（当時）の協力のもと唐人が352年ぶりとなる復興を遂げました。

本年は、平成の元号のもとで行なわれる最後の和歌祭（残念ながら雨天により今年度の和歌祭は

中止になりました。）ということもあり、平成に入って結成された和歌祭保存会青年部（現・実行委員会）の体制下で行なわれている現代の和歌祭に注目し、2018年4月10日（火）から6月1日（金）の期間で企画展「和歌祭と現代—祭礼のフェスティバル化と再興—」を開催しました。

太平洋戦争によって1935年（昭和10）以来中断していた和歌祭は、1948年に和歌山市商工まつりのパレードの演目として再興されます。それ以降毎年和歌山城まで「パレード」する商工まつりの目玉として、また紀州東照宮の「祭礼」の練物として県内外に周知されていきました。しかし、パレードの演目となったことで、祭礼としての様相は薄れ、御旅所はなくなり、また御船歌や餅搗踊囃子方などの芸能は失われ、さらに存続している芸能の技芸のいくつかは失われていきました。



これら芸能もとの姿を取り戻すべく立ち上がったのが和歌浦の若者たちでした。「和歌祭は和歌の浦で」を合い言葉に和歌祭を和歌の浦にもどし、2004年には舞姫の新設、2010年には御船歌、2012年には餅搗踊囃子方、さらに2017年には唐人が復興し、商工まつり時代以前に失われた芸能は復興されつつあります。

近年少子・高齢化や生業の変化などさまざまな原因によって全国各地の祭りや祭礼は失われつつあります。本展では寛政12年（1800）の復興以来、和歌浦で明治から発足した株制度をしっかりと継

承している餅搗踊、商工まつりで変貌を遂げた雑賀踊りや当時新設された腰元や女子神輿の装束、また平成に入ってから新設された舞姫、復興された唐船・御船歌、唐人などの装束や道具を展示し、和歌祭の芸能の近・現代での変遷を展示しました。少子・高齢化や生業の変化など、さまざまな現代的要因によって全国各地の祭りや祭礼は失われつつありますが、本展をとおして、これらの問題をどう捉えるかを考える機会としました。

（吉村旭輝）



オープニングイベント：和歌祭御船歌・唐人練り歩き

企画展「和歌祭と現代—祭礼のフェスティバル化と再興—」のオープニングイベントとして2018年4月10日（火）の12時30分から13時10分まで、和歌祭で唐船・御船歌を担当している唐船御船歌連中と本学留学生（教養科目「日本事情」受講生）による和歌祭御船歌・唐人練り歩きを開催しました。この企画は2011年の特別展「みる・きく・たのしむ和歌祭」から毎年開催しているもので、昨年から復興した唐人が加わって

います。このイベントは企画展を学内のみなさまにアピールすること、また和歌祭を学内で周知してもらい紀州の「藩祭」和歌祭への来客と参加者を募る目的で行なっています。昨年は残念ながら雨天のため、図書館前で復興した唐人装束の披露と御船歌の公演のみでしたが、今年は晴天に恵まれ、練り歩きを実施し、多くの学生や教職員にアピールすることができました。

（吉村旭輝）

【資料紹介】和大本和歌浦図屏風 江戸時代初期



紙本金泥彩色、六曲一双、椽杵白木。本紙98.3×235.2㎝、椽杵101.5×239.2㎝。紀州経済史文化史研究所蔵。第六扇に紀三井寺、第一扇には対面するように天満宮と東照社（宮）が描かれている。また中央下部は、玉津島社と考えられる。このような構図は和歌山県立博物館や東京国立博物館が所蔵する屏風と極めて近似している。共に作者は不詳であるが、人々の身なりや風体（女性の髪形、男性のひげなど）、あるいは金箔の大きさから具体的年代は断定出来ないものの概ね元和から寛永期頃と推定できる。また第一扇から第三扇に描かれている渡御行列は和歌祭と考えられ、そうだとすれば最古の絵図である。そこには、雑賀踊の原型と考えられる風流踊が描かれており、以降の和歌祭を描いた絵図は他に例を見ない。しかし、当時の粉本や一般的な知識や情報を元に描いているとも考えられるため、当時の風流踊、または祭礼の典型的な行列が描かれていると考えるのが妥当であろう。

（吉村旭輝）

和歌山高商文書でみる近代日本のあゆみ

企画展

2018年6月27日～8月9日まで、紀州研に所蔵される「和歌山高等商業学校文書」に基づいた企画展を実施しました。1922年に設立された和歌山高商は、和歌山大学経済学部の前身となる学校です。長い歴史のなかで残された史料群は多数にのぼります。とりわけ、文部省との往復文書、教授会会議録などは戦前期の学校を知るのみならず、戦前期の歴史を語る上でも貴重な史料となります。

企画展では、「和歌山高等商業学校の教育と研究」、「国民統合と民本主義」、「戦争と学校」、「敗戦と占領」に分けて、いくつかの史料を展示・解説しました。このなかのいくつかを紹介しましょう。「学徒勤労動員ニ関シ回答ノ件」(庶務課『文部省往復綴』、昭和18年1月)では、校長が「(教官が)行事ニ



引張り出サルルガ故ニ研究ノ時間乏シク」などと回答しており、戦争によって学校が疲弊する姿が浮き彫りとなります。

「学校集団整備要領」(『例規』、1943年以降)では、1945年7月に、戦争の深化とともに同一地方・同種学校における相互の連携・相互協力・現地即決によって、決戦に即応するため、官公私立の大学・専門学校・教員養成諸学校による学校集団の設立が決定していたことが明らかになります。敗戦によってこの計画は反故となりますが、戦争が高等教育の形を抜本的に変えようとしていたことが

分かります。こうした史料を用いて歴史の教訓を後世に伝えていきたいと思います。

(長廣利崇)

SNS
事業

資料紹介:和歌山高等商業学校文書

企画展はすでに終了しましたが、この様子はSNSを通して少しだけ見ることができます。SNSでは、和歌山高等商業学校の建物の写真も見ることができますが、史料をできるだけ写すことを試みました。

みなさんが歴史を学んだ時に最初に手にしたのは、歴史の教科書だったと思います。けれども、教科書に書かれていることは、結論にすぎません。結論を導く過程が重要となります。教科書に掲載されている事実は、もとをただせば、第一次史料の入念な分析に基づきます。

SNSにアップロードされている動画のほとんどは、第一次史料となります。「文部省往復綴」などの史料は、



世の中にひとつしかない、貴重なものです。しかし、こうした史料は、しばしば草書体で書かれています。とくに、近代に入れば、くずし字は人によって様々な個性が生まれ、読むことが難しい場合もあります。歴史を学ぶ時は、まず読むことから始めなければ

なりません。このSNSの動画の終わりには、花田校長(もしくは書記)の書いた文書を読んでいます。花田校長は、歌人としても有名であり、文章もとても上手いことで知られていました。花田校長の文書を読み、歴史の世界に誘われてはどうでしょうか。

(長廣利崇)

2018年9月21日～10月27日の日程で、和歌山県の3地域(那賀地方、美浜町、太地町)から、アメリカやカナダへ移民した人々にまつわる展示を開催いたしました。

本展示は6つのコーナーで構成されました。「アメリカ移民と那賀地方」では、米国雄飛を奨励した共修学舎の創設者・本多和一郎や塾生たち、ならびに同地方からアメリカへ移民した人々の資料を展示し、「カナダ移民と美浜町」では、スティブストンを中心として鮭漁にたずさわったカナダ移民に関連する資料を展示しました。「アメリカ移民—ロス港ターミナル島の太地人」では、パネルを用いてターミナル島に集住した漁師たちや缶詰工場で働いた女性たちを紹介しました。「戦争と日系人」では、太平洋戦争時に日本人移民や2世たちがアメリカやカナダで



収容所に収容されたことと戦後補償の一端を示しました。「世界の和歌山県人会」では、相互扶助の目的で北米や中南米で組織された県人会が現在も存続していることを紹介し、最後に現在、資料収集や調査、あるいは人的交流

を行っている和歌山県内の「移民・移住に関わる機関・団体」に活動を紹介していただきました。

この度も多くの方々にご来場いただきました。展示を通して新たな出会いがあり、新たな情報提供もいただきました。深謝申し上げます。

共催：那賀移民史懇話会 太地町歴史資料室

後援：(公財)和歌山県国際交流協会 和歌山県中南米交流協会

わかやま南北アメリカ協会 NPO法人日ノ岬・アメリカ村

平成30年度科学研究費助成事業(課題番号:18K11777)

(東 悦子)

2018年10月5日(金)、和歌山県における出移民の研究をされている東悦子先生(和歌山大学観光学部/紀州経済史文化史研究所長)と、20世紀初頭のフランスにおけるポーランド移民の研究をされている定藤博子先生(鹿児島国際大学経済学部)をパネリストに迎え、「移民」をテーマに対談イベントを開催した。

東先生からは、1880年代の日本は不況や凶作が深刻で、人々が海外に仕事を求めた一方、移民先のハワイやアメリカでは労働力が不足していたことが指摘された。定藤先生からは、第一次世界大戦による経済的・政治的混乱がポーランド人に移動を促した一方、戦場となったフランスでは農業と炭鉱業の復興に向けた労働者が必要とされていたことが指摘された。このように、送り出し国のプッシュ要因と受け入れ国のプル要因が相まって、それ以前に



は見られなかった大規模な移民が出現した点はお二人のフィールドに共通している。他方で、アメリカへの日本人移民が民衆や政府レベルでの移民排斥のターゲットとなったのに対し、フランスの炭鉱会社はポーランド人移民の生活環境の整備に取り組んでおり、それぞれが置か

れていた状況の相違点も浮き彫りになった。

また、一口に「移民」と言っても、社会階層や労働者としての熟練度など無視しえない違いもあり、お二人の対談は、移民内部の多様性への注意を促すものでもあった。

当日は定員を超える参加者にご来場いただき、「移民」というテーマに対する地域のみなさんの関心の高さを肌で感じる事ができた。

(西倉実季)

紀伊半島のロギオスたち— λόγιος — 紀州研に所属する研究者(ロギオス λόγιος)たちの 研究を紹介します

私の研究分野は、会計で、とりわけ「会計史」を専門としています。つまり、会計の歴史的な研究です。会計、といえば決算書や簿記検定のイメージが強いかもしれませんが。そしてそれを、歴史と結びつけるなど、あまり想像ができない方も多いでしょう。

そもそも会計史とは何でしょうか。中野・清水編著『近代会計史入門』の序文では、会計史という研究分野は、「会計研究と歴史研究との境界に位置する学際科学」だといわれています。長い歴史の中で、いかなる会計知識が存在したのか、それがどのようにかたちを変えていったのか、そこから現代社会に生きるものが学べることはなにか。会計史研究とは、今を生きる私達に、多くのメッセージを与えてくれるものなのです。



三光寺由実子先生(会計史学)

私は、研究のために、非常に古い会計帳簿を紐解きます。虫が食べた跡のある、ページをめくればハラハラと紙が落ちてしまいそうな、もろい紙片の帳簿。その中の、何百年も前に生きた人々が、必要があつて、記録に留めた内容を読み解いていくことは、この研

究をしていて最も心が躍る、楽しみでもあります。そして、見ているものが計帳簿ということもあり、時には巨額の不良債権や、意外な買い物をしていることなどが分かることもあり、そこには人間のドラマが広がっているのです。

このたびの動画を見て頂く中で、そのようなドラマ的一幕を、是非一緒に体感して頂けると嬉しく思います。

(三光寺由実子)

高嶋雅明氏は長く和歌山大学経済学部にお勤めになり、退任後は、広島修道大学・四天王寺大学で教鞭をとられてきました。日本経済史を専門とし、数多くの論文を執筆されております。

偶然にも高嶋先生が図書館で調べもの

をされている時にお声がけさせて頂き、今回のSNSにアップロードした動画の撮影をする運びとなりました。先生のご研究分野は、一ご自身で語られている通り一、金融史、情報の経済史、和歌山県域の近現代史となります。

この動画では、和歌山に関する研究が詳しく述べられています。『企業勃興と地域経済』(清文堂、2004年)は、先生の和歌山に関する長年にわたる研究がまとめられた



高嶋雅明先生(名誉教授 経済史学)

ものです。この本では、綿ネル業、銀行業、企業の盛衰などが研究されています。また、和歌山の通史として、『和歌山の百年』(山川出版社、1985年)も執筆されています。

和歌山の研究以外では、『朝鮮における植民地金融史の研究』(大原新生社、1978

年)があります。また、角山栄編『日本領事報告の研究』(同文館、1986年)では、「領事報告制度の発展と「領事報告」の刊行—『通商彙編』から『通商彙纂』まで—」を分担執筆されています。加えて、「熊野炭田覚書」(『紀州経済史文化史研究所紀要』第6号、1986年)などの金融史や紀州の歴史の多数の論文を執筆されています。

(長廣利崇)

三浦家文書について

三浦家は、初代藩主頼宣(家康の十男)の傳(補佐役)として家康につけられた紀州藩の付家老の家柄で、紀州藩では安藤家・水野家に次ぐ、紀州藩ナンバー3の家老です。初代の為春の母は、再婚してお万の方(頼宣の生母)を生んでおり、為春は頼宣の伯父にあたります。

三浦家文書は、紀州経済史文化史研究所に現在490点あり、1988年に和歌山県指定文化財となっている貴重な史料です。三浦家は、藩主の側近としての役割を担っており、儀礼的行事への参画、藩主代理として朝廷・幕府への参向、国政の総理、使者名代、藩主の御供などの職務に従事していました。そのため、三浦家文書も、知行目



上村雅洋先生(名誉教授 経済史学)

石橋生庵
「家乗」

録・藩御用の諸記録・知行所支配・家政役所の記録・家譜伝記類・書状控・冠婚葬祭・学芸などからなり、公務である家老としての役務関係の記録が大部分を占めています。

『御用番留帳』『江戸出府日記』には、和歌山・江戸での毎日の公

務が記され、藩主周辺の動向が明らかになります。また三浦家文書には、同家の儒医である石橋生庵によって書かれた日記体の記録である『家乗』(17冊)が含まれ、そこには当時の世情や武士の日常生活が描かれています(影印本で清文堂出版から全5巻で1984年に刊行)。

(上村雅洋)

紀州研所蔵2万分の1仮製地形図「和歌山」

明治初期に陸軍参謀本部陸地測量部によって整備された地形図である。全国で921枚が現存しており、正式には迅速測図とよばれる。当時の地形図は軍事機密であったが、本研究所が所蔵しているものはその複製である。和歌山の図幅は、1886年(明治19年)に刊行された。作成当時の土地利用や集落・都市の様子を記録しており、貴重な資料となっている。

和歌山の図幅をみると、城下町の名残を色濃く残した明治初期の和歌山市街地の様子がよくわかる。市街地の範囲は狭く、海浜部には水軒堤防などの構築物が判別できる。当時の紀の川には橋が架けられておらず、川の南北の往来は現在と比較にならないほど苦労するものであった。ゆえに、大阪方面との街道には渡し船が設置



藤田和史先生(経済地理学)

されていた。地形図には北島村(現在の和歌山市北島)に、和歌山市との間の渡し船の凡例が記入されている。紀の川の北側は、名草郡・海部郡の町村が点在しており、藩政村時代の名残をとどめている。

後の時代と比較すると、大きな変化がみ

られたのは海岸部であろう。紀の川加工の右岸は、浜堤が発達した砂浜海岸であったが、1942年の住友金属和歌山製鉄所の進出、第二次世界大戦後の臨海工業地域開発の影響によって、埋め立てが進んだ。現在では、加工の左岸側を含めて埋め立てが進み、海岸線は前進している。かつての水軒堤防は内陸に後退し、その趣も当時とはことにしているといえよう。

(藤田和史)

特別展

紀州経済史文化史研究所

2018年度 特別展

「加太・友ヶ島の信仰と歴史

——葛城修験二十八宿の世界——」

会 期／2019年1月10日[木]～3月8日[金]

会 場／和歌山大学 紀州経済史文化史研究所
展示室(図書館3階)

入 場／無料

開館時間／10:30～16:00(土曜開館時間13:00～16:00)

休 館 日／土・日・祝日

※その他、1月18日[金]、2月22日[金]、25日[月]、28日[木]～3月5日[火]は休館です。

※1月26日[土]、2月16日[土]は特別開館します。

※2月4日[月]より展示品の一部を入れ替えます。

※3月9日[土]～10日[日]には和歌山県立博物館にて、関連シンポジウムを開催します(要参加申込)。



行ずる者、迎える家、つなぐ人びと——。

葛城山系には『妙法蓮華經』の一品一品が埋め納められた二十八の経塚と、それらをめぐる途上で行者の心身を鍛え、山の持つ力にその身を浸す行場の数々——「葛城二十八宿」をめぐり修験の道のりがある。和歌山市加太は、その道のりの西端に位置し、第一経塚である序品窟を始め、観念窟・閼伽井跡・深蛇池といった聖地を島内に点在させる友ヶ島の対岸にあたる。その加太にはかつて伽陀寺と呼ばれる寺院があり、その寺の別当を務めた向井家が、現代でも行者たちを迎える「迎之坊」としてその伝統的な役目を継承し続けている。修験の道々の「鬼の家」を継ぐ人びともまた、行者たちの修行を今も支え続けている。

本展覧会では、和歌山大学 紀州経済史文化史研究所に寄託いただいた「向井家文書」を大きな軸にすえ、向井家に蔵される文化財の数々もお借りし、加太と友ヶ島という地域の信仰とそれを担ってきた人びとの、そして葛城修験の歴史をふりかえってみたい。

(主担当:大橋直義・吉村旭輝)

紀州研所蔵品紹介

西国巡礼道中笑草

文久三年[1863]福富半兵衛写



紙本墨書・淡彩色、二巻二冊。13.5×19.1 ㎝。紀州経済史文化史研究所蔵。美濃国・犬山白帝城住人の福富半兵衛が伊勢へ向かい、その後、那智青岸渡寺を起点として西国順礼を行なう道中記。何より、その所々で札所寺院や熊野本宮・新宮、道成寺、高野山などの古刹を含め、淡彩色にて描画している点に注目される。ただ、「黒船」の絵などを除き、その視点は上空に置かれることから、既に存在している絵に基づいて描かれたものとも考えられるが、原拠は判然としていない。その点、巡礼者の視点から描く『西国順礼略打道中記』(舞鶴市糸井文庫蔵)とは様相が異なると言えようか。その本文は、行程面において『西国三十三所道しるへ』(養流軒一筆子撰、元禄三年[1690]刊、三巻三冊)と共通する点が見られ、これを参照した可能性が高いとは言えるものの、文久年間の状況を克明に記しており、旅程の状況(宿場町における物価の詳細や茶屋の数など)、巡礼道における「見物」の実態など、幕末における巡礼空間を把握するためには大きな価値を有する一書であると言える。

全丁の画像は紀州経済史文化史研究所 2017年度特別展「紀州地域と西国順礼」図録(無償頒布)に掲載済。翻刻は『紀州経済史文化史研究所紀要』40号(2019年刊行)に掲載するため準備中。

(大橋直義)